

論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻生活健康科学プログラム
2018年度入学
181-700003-7
おぎはら まきこ
荻原 牧子

1. 論文題目

高齢者のテレビ視聴とフレイルとの関係
—フレイルの人がテレビ視聴に求めるもの—

2. 論文要旨

わが国は、高齢者の総人口に対する割合が28.4%という少子高齢社会である。高齢者の平均寿命と健康寿命の差は縮まっていないことから、要介護高齢者の数も増えているのが現状である。このため、健康寿命の延伸と健康格差の縮小を目標とした、フレイルの人への介入が注目されている。なぜならば、フレイルは、しかるべき介入により再び健常な状態に戻るという可逆性があるからである。このような背景から様々な施策が展開されているものの、フレイルの人の参加率は低迷していることから、健康な人とフレイルの人の健康格差も広がっている。そこで、フレイルの人への効果的な介入には、フレイルの人の求めているものを理解することが必要ではないかとの着想を得た。

人は自分が求めていることを動機として行動を起こしやすいと考えられるが、介入の場面を考えても、求めているものを理解することは重要なことである。本研究では、フレイルの人に特徴的な求めるものを明らかにすることを目的とし

た。フレイルの人のそれは日常生活に表れていると考えられることから、高齢者の余暇時間の多くを占めるテレビ視聴に着目し、視聴動機および視聴番組と生活機能および認知機能との関係分析から明らかにしようと試みた。そこで、地域在住の高齢者を対象として、質問紙による生活機能およびテレビ視聴調査、認知機能検査を実施した。

はじめに、本研究で対象とした高齢者のテレビ視聴実態が、一般高齢者を対象とした先行研究と乖離していないかどうかについて確認し、本研究の一般化の可能性を検討した。

対象とした高齢者のテレビ視聴は、視聴時間が概ね 3 時間であり、視聴時間帯は食事時間に合わせて一日 3 回のピークがあり、夜間が一番多いこと、視聴動機は情報動機が優先し、後期高齢者は前期高齢者に比べて、仲間関係動機が増加すること、健康や病気に関する番組や歌・音楽や時代劇を多く視聴すること、また、欲求としての視聴動機とそれを充足する視聴番組の結びつきがみられた。これらは、一般高齢者を対象とした先行研究との比較においても大きな相違が見られず、また、時代を経ても大きな変化はない可能性が示唆された。このことから、本研究の対象者は一般的な高齢者であると考えられ、本研究により得られた結論は一般化できる可能性が示唆された。

そこで、本研究の対象者のテレビ視聴について生活機能および認知機能の面から検討し、フレイルの人の求めるものについて考察した。

まず、視聴時間と視聴時間帯についてみると、生活機能の面では、視聴時間との関連はなく、視聴時間帯においては、運動およびうつフレイルの人は夕方のテレビ視聴が多く夜間は少ないことから、起床している生活時間は短縮している可能性が示唆された。一方で、認知機能の面では、視聴時間帯との関連はなく、視聴時間においてフレイルの人は健常の人に比べて短かった。これは、テレビ視聴による比較的強度な視聴覚刺激や過度の認知負荷を避けるために、フレイル

の人は短時間になると考えられた。

つぎに、生活機能と視聴動機および視聴番組との関連の検討からは、健常群とフレイル群の比較において、フレイルであるほど人間関係動機因子が強く、学習教養、娯楽、社会・情報の各番組因子の視聴が少ないことが示唆された。また、フレイルの人の視聴動機において、逃避および時間つぶしの項目が選択されており、一時的な現実逃避とともに、その時間をテレビ視聴で埋めるということが推測された。さらに、フレイルにおいては、科学・美術、歴史・風土の番組視聴は避けられるとも考えられた。視聴動機の強さと番組の視聴頻度との相関をみると、健常群の場合には特定の視聴動機の強さと相関のある視聴番組はわずかであった。しかし、フレイル群の場合には、多くの特定の視聴動機とそれぞれ複数の視聴番組とが相関があり、しかも健常群との比較において視聴頻度が減少していた学習教養、社会・情報の各番組も情報の動機の強さとの間に相関が生じていた。このことから、フレイル群は、特定の番組の視聴頻度を上げる視聴動機が、健常群より多く存在することが示唆された。このような動機による視聴番組の選択は、すなわちフレイルの人の欲求を表していると考えられ、視聴番組の選択別にみると情報因子が最も多く、次に娯楽、人間関係の各因子となっていた。情報因子に結びつく視聴番組には、政治・経済・社会と歴史・風土番組が多くを占めており、過去、現在の時間軸および地理的空間軸において自身を位置づけるために視聴していると考えられ、また、フレイルであるが故に、健康・病気番組の視聴によりその情報を得ようとしていると同時に、テレビ視聴を他のメディアよりも優先して利用している可能性も考えられた。このことから、フレイルの人の求めるものは、自身を取り巻く情報の取得欲求であることが推察された。さらに、娯楽因子に結びつくインタビュー番組をはじめとするワイドショー番組やクイズ・ゲーム番組等と、情報因子、娯楽因子、人間関係因子にも結びつく通販番組の特性を考えると、人との交流の疑似的な場となっている可能性も考え

られた。これらから、フレイルの人が求めるもう一つのものとして、他者との交流があると考えられた。

認知機能と視聴動機および視聴番組との関連の検討において、各番組の視聴頻度を目的変数とし、認知機能の項目を説明変数に置いた重回帰分析の結果により、記憶機能の低さは行動の指針動機を強くし、思考機能の低さは紀行・旅、歴史・風土、趣味関連、健康・病気の各番組の視聴を増加させることが示唆された。また、視聴動機の強さと番組の視聴頻度との相関をみると、健常群の場合には特定の視聴動機の強さと相関のある視聴番組はわずかであった。しかし、認知的フレイル群の場合は、特定の視聴動機の強さと相関のある視聴頻度の多い番組が複数あった。特に情報因子でカテゴライズされる社会情報、行動の指針、接待の知恵、商品情報、興奮の各視聴動機と相関のある視聴番組が多いことおよび、ニュース・報道番組を毎日視聴していることから、認知的フレイルの人は、日常生活に関する情報を求めていることが推察された。さらに、生活機能のフレイル群とも共通するインタビューと通販の両番組の視聴頻度と情報因子の視聴動機とは相関があり、これらの番組の特徴となるわかりやすさ、臨場感のあるコミュニケーション、視聴者への語りかけの各要素を考慮すると、情報を求める際に他者とのコミュニケーションも求めていると考えられた。このことから、認知的フレイルの人がテレビ視聴に求めているものを考えるとき、それは、情報の享受とその際の他者とのコミュニケーションであることが示唆された。

これまで述べてきたように、生活機能のフレイルと認知的フレイルには多くの共通する視聴動機と視聴番組があり、そこから導出されるのは、社会情報および日常的な情報と、情報享受の際の友好的な他者との交流を求めていることが示唆される。

人は、心身機能が低下するほど社会的役割を喪失し社会から離脱してゆかざるを得ないが、社会的な動物であるが故に、他者との交流欲求は普遍的であろう

と考えられる。また、自身の健康状態や社会的、歴史的、地理的位置を確認し、日常生活を円滑に送るための情報を求める気持ちがあると考えられる。そして、フレイルの人は、これを充たす手段の一つとして、あるいは優先的にテレビを活用している可能性も示唆される。

人との擬似的交流の場となっているテレビ視聴から考えられるのは、現実空間における社会的交流の場の必要性である。これは、現在、全国各地で実施されている介護予防活動にも重要な視点を提供するものである。認知症の人のケアの概念に Kitwood T.により提唱された person-centered care(PCC)がある。これは、認知症を抱えて生きる人の心理的な欲求を満たし、社会の一員として認め、その人の視点を理解する努力を惜しまないとするものである。このことは認知症の人に限らず、フレイルの人にも必要な考えであることが今回初めて示された。また、フレイルの人自身が身を置く社会の情報を求めていることも、同様に初めて示された。

テレビは、日本において 1950 年に NHK が定期実験放送を開始してから 70 年を経過し、多くの世代の生活の中に浸透しているメディアである。インターネットの使用も広がっているが、高齢者にとっては依然として最も身近で簡便で経済的かつ信頼できる情報源であり、しばらくはそうであろうと予想される。なぜなら、年々視聴覚機能の低下する高齢者にとって、テレビ受信機の高画質化と大画面、および聞き取りやすい音響の進化は、現在においては情報享受のための補完機能が高く、また、数十年にわたり使い慣れている機器だからである。また、介護予防に資するテレビのあり方としては次のことを展望する。介護予防において提唱されているのは栄養、身体活動、社会参加である。これは、まず、家から一歩外に出て、自然環境やその他の物理的環境、偶然会う人や動物による刺激入力に対応することにより促進される。そのための放送番組には、現在よりもさらに身近で費用負担の少ない場の情報提供を通して外出を促すことが求められ

る。一方で、外出が困難なフレイルの人にとって疑似的な人とのコミュニケーションがフレイルの改善に効果があるとするれば、テレビ番組には、インタビュー番組や通販番組に見られるような映像表現方法を取り入れることも必要であろう。テレビ視聴は、健康状態に負の影響を与えるものとして認識される要素もあるが、フレイルの人においては重要な役割を持つ可能性も考えられる。

以上

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Makiko Ogihara

The relationship between TV viewing and frailty in older adults: What frail older adults seek from TV viewing

Japan is an aging society with a low fertility rate; the ratio of older adults to the total population is currently at 28.4%. Since the gap between average life expectancy and healthy life expectancy among older adults has not narrowed, the number of older adults requiring long-term care continues to increase. For this reason, attention has been drawn to interventions for frail older adults, with the goal of extending healthy life expectancy and reducing health disparities. This is because frailty is reversible, which means that, with appropriate intervention, the affected person can return to a healthy state again. Against this backdrop, various measures have been developed, but the participation rates of frail older adults have remained static, with health disparities between healthy and frail individuals continuing to widen. In this context, I hypothesized that effective interventions for frail older adults would require an understanding of what such individuals are seeking.

When taking action, people are generally likely to be motivated by what they are seeking, and it is important to understand what they are seeking when considering intervention scenarios. The purpose of this study was to identify characteristic expectations of frail older adults. We focused on TV viewing, which occupies much of the leisure time of older adults, and attempted to clarify the relationship between their motives for watching TV (and specific programs) and their mental and physical functions. To this end, I conducted a questionnaire survey of daily life functioning and TV viewing, and a cognitive function test, among community-dwelling older adults.

First, we checked whether the actual TV viewing patterns of the older

adults in this study deviated from those in previous studies of the general older population and examined the generalizability of the present study.

The older adults in the present study watched television for approximately three hours, with three peak time zones per day that coincided with meal times, with nighttime being the most common viewing time. The primary viewing motive was information-seeking, although the companionship motive was more prevalent among the older-old (75 years or older) compared with the younger-old (74 years or younger). They watched more programs related to health and disease, songs, music, and historical dramas, and there was a link between a specific viewing motive as a desire and the programs that satisfied that motive. These findings did not significantly differ from those of previous studies on the general older adult population, suggesting that viewing motives and programs watched do not change significantly over time. This implies that the participants in this study could be considered representative of the general older population; hence, the conclusions drawn from this study may be generalized.

Accordingly, we examined the TV viewing of the participants in this study in terms of their daily life and cognitive functions, and considered what frail older adults were seeking.

In terms of viewing time, no relationship was found between daily life functioning and viewing time. In terms of viewing time zone, the participants who were physical frail and depressed watched TV more in the evening and less at night, suggesting that their waking hours may have been shortened. On the other hand, in terms of cognitive functioning, no relationship was found with viewing time zone, but the cognitive frail group had a shorter viewing time than the healthy group. I speculated that the frail group spent shorter periods of time watching TV in order to avoid relatively intense audiovisual stimuli and excessive cognitive load.

Next, in terms of the relationship between their daily life functioning and their viewing motives and the programs they watched, a comparison between the healthy and frail groups suggested that the relationship as a motivational factor was stronger among the frail group, as these individuals spent less time watching programs with educational, entertainment, and social and informational contents. In addition, the viewing motives of many of the frail older adults were escapism and time passing, suggesting that they wished to temporarily escape reality and fill their time by watching TV. Furthermore, the frail group appeared to have avoided watching science and art, history and climate programs. In terms of the correlation between the strength of the

viewing motive and the frequency of program viewing, only a few programs were correlated with the strength of a specific viewing motive in the healthy group. In the case of the frail group, however, multiple programs were correlated with many specific viewing motives. Furthermore, educational, social, and information programs, which were viewed less frequently than among the healthy group, were also correlated with the strength of the information motive.

These results suggested that the frail group had more motives to watch certain programs more frequently than did the healthy group. Their selection of programs to watch based on motives was considered to be representative of the desires of frail older adults. In terms of program selection, the information factor was the most common, followed by entertainment and relationship factors. Political, economic, social program and historical, climate programs were the most common programs that were linked to the information factor, suggesting that the viewers watched these programs to position themselves within a temporal framework in relation to the past and the present, as well as within a geospatial framework. It could also be speculated that, because they were frail, the frail older adults in this study tried to obtain relevant information by watching programs on health and diseases and, concurrently, prioritized viewing TV over other media. This would appear to suggest that what frail older adults seek is information in relation to themselves. Furthermore, in light of the characteristics of variety shows such as interview programs and quiz and game programs, which are associated with the entertainment factor, and the characteristics of teleshopping programs, which are also associated with the information factor, entertainment factor, and relationship factor, one could speculate that these programs provided a means for pseudo-interaction with other people. These results suggest that frail older adults also seek to interact with others.

In terms of the relationship between cognitive functioning and viewing motives and programs they watched, a multiple regression analysis with the frequency of watching each program as the objective variable and the cognitive function items as explanatory variables revealed that low memory function enhanced the viewers' motivation to act, and that low thinking ability increased the frequency to watch travelogue or travel, history and climate, hobby, and health and disease-related programs. In terms of the relationship between the strength of the viewing motive and the frequency of program viewing, in the healthy group, only a few programs were correlated with the strength of a specific viewing motive. However, in the case of the

older adult group with cognitive frailty, there were several frequently watched programs that were correlated with the strength of a specific viewing motive. In particular, the large number of programs correlated with the following viewing motives categorized by the information factor: social information, behavioral guidelines, social interaction, product information, and excitement; further, the daily viewing of news and newscast programs suggested that older adults with cognitive frailty seek information about daily life. Furthermore, there was a correlation between the frequency of watching interview and teleshopping programs, which was common in the group who experienced frailty in their daily life functioning, and the motive for watching programs related to the information factor. In light of the elements that characterize these programs, such as ease of understanding, realistic communication, and talking to the viewer, the study surmised that these older adults were seeking communication with others when they sought information. These considerations suggest that what older adults with cognitive frailty seek from TV viewing is information and communication with others during the viewing process.

As noted, many commonalities were found between frailty in daily life functioning and cognitive frailty in terms of motives for viewing and the programs that the respective types of older adults watched, suggesting that both types of frail older adults seek social and daily information and friendly interaction with others when they receive information.

As people's mental and physical functions deteriorate, they tend to lose their former social roles and become disengaged from society, but because they still wish to retain social connections, they retain a desire to interact with others. They also have a desire to check their own health status, to continue to orientate themselves socially, historically, and geographically, and to seek relevant information to facilitate their daily lives. My results suggest that frail older adults use TV as a means of fulfilling these desires, or use it preferentially.

The role of TV viewing in providing a place for pseudo-interaction with others suggests the need for a place for social interaction in the real world. This insight adds an important perspective in relation to Preventive Long-term Care Projects that are currently taking place throughout Japan. Person-centered care (PCC) is a concept of care proposed by Kitwood for people with dementia. This concept hinges on fulfilling the psychological desires of people living with dementia, recognizing them as members of society, and making every effort to understand their points of view. The present study is the first

to show that PCC is not only essential for people with dementia but also for frail older adults, and that frail older adults themselves seek information about the society in which they live.

Since the Japan Broadcasting Corporation (Nippon Hōsō Kyōkai [NHK]) began regular experimental broadcasting in Japan in 1950, television has been a media that has permeated the lives of many generations. Although the use of the Internet is spreading, television remains the most familiar, convenient, economical, and reliable source of information for older adults, and is expected to remain so for some time. This is because, for older adults whose audiovisual functions are declining year after year, the higher picture quality and larger screens of TV receivers as well as the evolution of easy-to-understand sound are now highly complementary to the information they receive, and they have become accustomed to using these devices for several decades. This situation highlights a possibility for using TV as a means of contributing to care prevention. Nutrition intake, physical activity, and social participation have been recommended as important aspects of care prevention. Care prevention is first facilitated by going out of the home and responding to stimuli from the natural and other physical environments, as well as from people and animals that frail older adults happen to meet. To this end, TV programs should be made to encourage people to go out by providing information on places that are more accessible and less costly for such people. Furthermore, to the extent that simulated communication with others is effective in improving frailty for frail older adults who have difficulty going out, TV programs should be made that incorporate visual expression techniques typically found in interview and teleshopping programs. Although TV viewing has been perceived as having a negative effect on the health status of some people, it may have an important role in relation to frail older adults.

END

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻生活健康科学プログラム
氏名 荻原牧子

論文題目

高齢者のテレビ視聴とフレイルとの関係
—フレイルの人がテレビ視聴に求めるもの—

審査委員氏名

- ・主査（放送大学准教授 博士（環境学）） 川原 靖弘
- ・副査（放送大学教授 博士（保健学）） 戸ヶ里 泰典
- ・副査（放送大学教授 博士（学術）） 岩崎 久美子
- ・副査（桜美林大学教授 博士（医学）） 長田 久雄

論文審査及び試験の結果

研究では、昨今、介入の有効性が指摘されているフレイルの状態の高齢者に着目し、高齢者の生活の大きな部分を占めるテレビ視聴の状況と健康状態との関連を解析することにより、フレイルの高齢者が特徴的に求めているものについて論じ、介入が実現しにくい層へのアプローチにおいて必要となることを示唆している。

高齢者の健康状態は、質問紙調査により、生活機能と認知機能の評価を行い、この結果に基づく健康状態とテレビ視聴の動機との関係を示している。またこの動機を満たすと考えられる、テレビ番組ジャンルの視聴頻度と動機の強さとの関係を分析し、それぞれの動機を持つフレイルの高齢者が求めているものについて関連する番組内容から論じている。特徴として抽出された、人間関係に係わる動機を持つときにインタビュー番組を視聴していることや、情報取得に係わる動機を持つときに健康・病気を扱う番組を視聴していることなどは、フレイルの高齢者が求めていることを端的に示しているデータと考えることができ、現在の方法では介入が難しいフレイルの高齢者に対し、新しい介入のアプローチを試みるヒントがあるという意味では、研究成果の社会的意義は大きい。

高齢者のフレイルに関わる健康状態とテレビ視聴の状況との関連を示したことにおいて新規性があり、その解析方法と結果について、論文において論理的且つ明快に示されている。予備論文審査において指摘された事項は適切に修正され、口頭試問においては、発表はわかりやすく、質疑に対しても適切な応答がなされた。一部調査方法に不備があり十分に論じることができていない部分があったが、この調査結果がない状態でも結論は明記できるので、参考調査として章の外に出すことで、論文の最終修正を行うこととした。

よって、博士論文として採択し、合格とする。